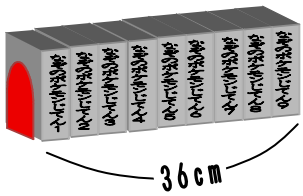
コラム　授業の三つの間への絶妙な技

2005. 7 月

ついこの間，清々しくなる授業を参観した。研究授業ではない，自主的に公開された極々普通の授業である。

3年生の算数科「かくれた数はいくつ(2)」という単元で，内容は二桁÷一桁の割り算である。問題は「同じあつさのじてんが本立てにあります。9さつで，はば36cm の本立てがいっぱいになりました。じてん1さつのはばは，何 cm でしょうか。」である。いろいろなつぶやきが出てきた。しかし，教師は簡単には反応しない。「後で話し合わせてあげるね。」と言い，一人追究が始まった。その15分後，このクラスの特別なルールの「探検」が始まった。互いの考えの交換でいわゆるフリーに話し合う時間が用意されていた。



次の集団化では，Y君は36÷9，Nは9÷36という。F君が黒板に線分図を描き，36÷9になることを一生懸命に説明した。しかし，他の子どもたちは，答えに意識が傾き，九九の九の段をすれば，4cm と分かると言う。なんとここで子どもたちは満足しそうになったが，教師は「なんで割り算か」と問うた。一瞬，けげんな空気が流れた。O君が「9冊で36cm の本立てがいっぱいになって，1冊のはばだから9に分けていくと1つずつになる。」と言った。そのあと，この発言からSが昨日の宿題の問題との関連を言い始めた。

授業は，教室という空間と二度とやってこない学習過程という時間の中で，教材を介して教師と子どもという人間(仲間)が新しい価値を創り出す営みである。したがって，教師は空間・時間・人間(仲間)の三つの間にどのように介入していくが重要である。

この数年，現場の傾向として，自他とのかかわり合い(学び合い，高め合い，聴き合いなど)が，非常に重視されている。大切な力を求めていることもわかる。しかし，自他とのかかわり合いには，どこで・どのくらいという空間と時間への関与も絶対に必要となる。先の算数科授業においても，しっとりと，しかもゆったりと算数問題にかかわらせている。子どものたくさんのつぶやきも，聴いているが即応しない導入であった。教師の口調・速さ，声の大きさも心地いい。また，聴き合い，問い合う姿もたくさんあった。学習仲間とかかわらせる時間と空間への教師の絶妙で巧みな技を感じる。

子どもの学びとは，子どもの思いや願いを大切にした授業であり，子どもが創る授業である。研究授業などの特別ではない授業で，3つの間が溶け合っている授業を見せていただけたことが非常に嬉しい。この溶け合った塩梅をこれからどんな味にしていくか，2学期以降が楽しみになった。(芝)